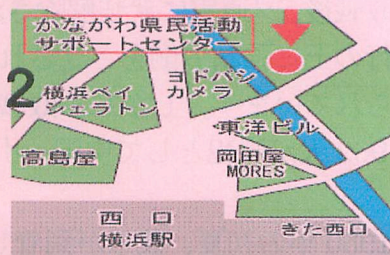


第5回神奈川証言集会

<日時> 8月9日(土) 12時30分開場(13時開会)

<場所> かながわ県民センター402

資料代 500円



第1部 「海軍での戦争体験と戦争の反省」

証言者: 安島 榮さん (83才・撫順の奇蹟を受け継ぐ会会員)

海軍の体験者で、撫順の奇蹟を受け継ぐ会の会員は安島さん(横浜市金沢区在住)のほかにおられるだろうか。

安島さんは17歳のときに4ヶ月間の猛烈な受験勉強をして、1937年12月に陸軍士官学校と並ぶ「士官養成所」、江田島海軍兵学校に入学しました。やがて時局が切迫して、特攻隊への志願の道を選ばなければならなくなりました。「海軍体験者の目」から戦争への反省について語っていただきます。

第2部 「無知は無恥なり；戦争の記憶を風化させないために」

講師: 姫田 光義さん (中央大学名誉教授)

姫田先生は中国近・現代史研究の第一人者です。80年代の後半には1年半にわたって天津南開大学で研究し、その間に数多くの人知れぬ「万人抗」や、日本軍の中国人への虐殺現場を訪ね歩きました。そして万里の長城に沿った広大な地域の日本軍による「無人区」化政策の実体を明らかにしてくれました。先生の著書「もうひとつの三光作戦」に書きしるされています。

もっともっと私たちが知らなければならない事実について、貴重なお話しをしていただきます。

撫順の奇蹟とは

敗戦後、ソ連軍に武装解除されて60万人もの日本軍将兵たちが酷寒のシベリアへ連行の上に強制労働をさせられて、その内6万人もの尊い命が奪われた事実は広く知られています。しかし、敗戦から5年後までシベリアに残されていた一部の中から969人が戦犯として中国へ引き渡された事実はあまり知られていません。

1950年の初夏、彼らが到着したところは**撫順戦犯管理所**だった。かつて日本軍が占領していた時代の**撫順監獄**で、「抗日分子」への拷問で悲鳴の聞こえなかった日はなかったそうです。皮肉にもそのときの看守長も収容された。

俺たちは戦犯ではない 運命の暗転におびえ、自暴自棄になり、抵抗する日本人戦犯たち。戦争が終わってもう5年。**軍の命令に従っただけだ。今さらどうして俺たちが戦犯なんだ。**・・・しかし、彼らの中の多くの者は戦争中、捕虜や民衆を殺し、食糧を奪い、家々を焼き払い、毒ガスや生物兵器を用いて戦争犯罪を行っていた。

そんな彼らが戦犯管理所に来て驚いたのは、充実した設備に1日3度の食事、そして管理所職員による人道的な待遇でした。さらに自由な時間を与えられ、戦犯たちはそれまで経験したことのない生活を送ることとなります。

しかし、**被害者の痛みを、この戦犯たちが心から理解できる日は来るのか** 戦犯たちを収容し、管理した職員たちは、その誰もが日本軍によって家族を殺され、姉妹を犯され、自ら傷つき、抗日と革命に身を投じた者たちだった。

人道的な待遇と、人生で初めて与えられた、ありあまる時間のなか、やがて戦犯たちの心に変化が生じ始めました。暖かく接してくれる職員たち、彼ら中国の民衆に対して自分はどんなことをしていたのか。それから戦犯たちの、今に至る、**“認罪の旅”**がはじまったのです。

やがて「あれを話せば自分は死刑になる」という事実を認め、謝罪した。6年間の時間が必要だった。罪を認めた戦犯たちは中国の寛大政策によって許されて1957年に帰国した。すでに戦後12年が経っていた。少しずつ生活を取り戻した彼らは「中国帰還者連絡会」を結成し、「日中友好、反戦平和」と基調とした活動を展開してきました。

撫順の奇蹟を受け継ぐ会はその精神と事業を受け継ぐために結成しました。

撫順の奇蹟を受け継ぐ会 <http://www.tyuukiren.org/>